青書
源氏物語
五十三

東京都立中央図書館
加賀文庫

○河　並一卷名　按察大納言折紅梅奉兵部御宮

○花　以詞為卷名白兵部御卷よハ董宰相中將と尼こうし十九歳の正月九日とろせり此卷よハ源中納言こいろ同十九歳の秋也故竪の並ろるくし又宇治八宮乃姫君と心とりかゝ仕る事此卷の末ろ尼こうし椎本の卷と同時九ろろ白宮卷九同時のろよハ有と

○弄　白宮卷並の一也此卷ハ竪の並也春のろ有ようて也されとも紅梅竹川と

○細　或祝竹川と一の並とろ共故ハ董の幼少九時ろりのろ有ようて也されとも紅梅竹川と次ろ尼こうし宜也此並ハ竪の並とろ人こうし但横ともつくさうや董廿一廿二歳のろ〻花鳥三ケ年の異あり幼卷と此卷とハ十七八ケ年の間也○或祝　董廿歳春のろ〻住中納言ろ有以下廿二歳ろ人

○そのころ　弄　後号紅梅右大臣按察大納言任大臣以前也此卷の末ろ右大臣ろ任と同時ろ霧花ろ搏と董中納言ろ成也是ハ竹川の末ろと椎本の末ろと同時也別ろ註と　細　此時紅梅右大臣也さきと前の官按察大納言ろ有し故ろ人のひろ〻ろ分と〻ろ也

○ろ〻ろ　細　賢木卷ろ高砂うひ〻人也

○ととろのハ　細　誰人ととろ

○のろの大切〻　細　鬚黒ヒ云也野路後西説也河海忠仁公と古今ろさきの大切ろいまろ君と

くまゝる義あり後義を可然

○式部卿宮　或抄　まきはしら姫君の祖父也　紫上の父也

○故兵部卿のみこ　弄　螢兵部卿宮うせ給ひし事也　幻巻と此巻とのあひ十七八年也其中にわかれ給ふこの人うせ給ひし薫の年にてかぞへしるへしといへり

○忍ひ給し　細　紅梅大臣のしのひ給ふ也

○御子ハ　弄　紅梅大臣本内室の腹に女二人當腹真木柱男一人此腹に螢宮の女一人

○こ宮の　細　螢宮也

○おなしこと　或抄　同子如同　女義也

○をの〳〵御方の　弄　母まち〳〵子ともあれハつき〳〵の人々のくねくねしき事ともいてくるも世のならひとそ申侍る

○我御かたさまに　或抄　槙柱のはらからにて紀子の乳母よくもなくもいへる宮の姫君も一ふしにおもひなすると也

やうのみやにて、こひやうぶきやう
のみこにあはせたてまつり給ひしを、
みこうせてのちやみて、おはしゝかど、
に、あはせたてまつりしを、
みこうせ給ひてのち、しのびつゝ
かよひ給ひしかど、年月ふれ
ばえさしもはゞかり給はぬなめり。
御子ハ故北の方乃御はらに、
二ところぞおはしければ、さう〴〵し
とて、神仏にいのりて、いまの御はらの
にぞをとこぎみひとり
まうけ給へる、こ宮の御かたに

女ぎみひとゝころおはす、へだて
わかず、いづれをもおなじこと
おもひきこえかはし給へるを、
をの〳〵御方の人などは、うるはしう
もあらぬこゝろばへうちまじり、
なまくね〳〵しきこともおこる
とき〴〵あれど、北のかたいとはれ
ばれしくいまめきたる人にて、
つみなくとりなし、我御かたざま
にくるしかるべきこともなだら
かにきゝなし、思ひなほし給へば、
きゝにくからでめやすかりけり。

○君しつかるゝ　或抄　紅梅の息女二人
宮の姫君なとは人まて裳着しはて

○人やのゆゝ　細　兵乃宮の姫君也

○こうきうきの　細　父宮祖父宮よりのゆゆり有

まてうちきおゝ〻ぐふすゝく
ゆうちびはの目ばかりおゝ
さてまうはてゝ　ゝ　ゝ
でんらく　ゝ　ゝ
うんなとりてよ　ゝ　ゝ
はかりむめ　ゝ　ゝ
しふくの　ゝ　ゝ
そまうはてゝ　ゝ　ゝ
はりふかゝ　ゝ　ゝ
ゝんゝらゝ　ゝ　ゝ
うゝのは　ゝ　ゝ
して　ゝ　ゝ

○きゝんひめくまりう　弄　宮の君れきゝんひ也

○きてて　細　のゝゝゝ人はりゝ

○ゆよは中宮　巴抄　明石中宮ゝ

○ひをせんと　河　卑下

○右のかゝいとの　巴抄　夕霧の右大臣の女れはゝ
もとと今はたゝれともりゝのと右といて

うゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ

○さけらひてや　孟　さこうう　ひてりしうくせ
ぬるすることとしてし

○七八のかと　弄　紅梅の嫡女也

○うちとろひて　孟　とろとろうて也　次第くうと　五心也

○さと　初句　孟　中君と白宮の心也　せあれ
うしと也

○此　とろ君を　花　紅梅大臣の子息　真木柱の腹の
若君也　是と白宮こうこうれあるる也

○心こうあるて　取物　紅梅の息女也

○せうこうとうて　細　白宮の羽
巴物　兄弟　ハうとうて　ハいう　世君こうとうて
と白宮の初句せうこう也

○さうんと　弄　紅梅こうこう也

○いとうひあると　細　紅梅大臣の心也

○人こうこうん　孟　此初句　紅梅大臣初也　内(まう)
せんううハとう

あどでそぎしこうるこのうこうみ
をうちてるどうをおとさ
ハうまうしたうびをうさふ
しおうこうどうこうておくうて
うこううまみひうつこうう
せうこうとうてのこうえやそうと
ちのこうふうせうふどのおひ
こうるうをこうんこうきうまこび
うこううていこうひあうこうび
しこうこうんこうやづこう
うこうこのうやのこうこうん
ちのハこうせうてまうこうれせし

○春日の神乃 河 閑院左大臣冬嗣以来代々藤氏
執柄臣女后妃にそなはり給ふべき心也
花 源氏のおほく立后の事ハ少女巻 若菜下巻
にみえたり 下略 後朱雀院長暦年中の事を引
○故ちしの 花 致仕大臣の御女院の女御弘徽
殿と申しも秋好中宮におされ給て立后の
事なかりしをむねいたくおもひ給へりし也

○まいらせ奉り 或抄 麗景殿と申也

○かゝる御まじらひ 孟 むすめをまいらせてハ其
真木柱のそひて内へまいり給也

ころのいまめかせて。つゞる
てんそうそんはいのちのび
めでたさやの御さいはひより。氏は
ひかるまづ。まうとの御ことを
いそぎはらく。春日の神の御
ことわりも。わが世にやもしいで
きて。故ちゞのおとゞの女御の
御ことをむねいたくおぼして
やみにしなぐさめのこともあらん
とこゝろのうちにいのりて参ら
せたてまつり給ふ。いとときめき
給ふよし人々きこゆ。かゝる御まじらひ

○とのハつれ〴〵 細 紅梅大臣也真木柱君春宮へ
まいり給へるゆへ也
○西の御方 弄 西の御方南の御方とひとつにならひし
也つれ〴〵なるとハ父の大納言の心也西の君東の君も
かたちく〴〵見る 細 西の君ハ中君也
○ひんかしの 細 蛍兵部の御女也
○ひとつ所に 或抄 宮君と中君と中よき也
○こなたをしの 河 師
弄 宮君ハ中君を師とならひ給ふ也

なれ給はぬほどに。はかばかしく
しきうしろみなくてはいかゞ
とて北方そひてさぶらひ給へば。
まことにかぎりなくおもひかし
づきうしろみきこえ給ふ。殿はつれ〴〵
なる心ちして。西の御方は一つ
にならひ給ひていとさう〴〵しく
ながめ給ふ。東のひめぎみも。
うと〳〵しくかたみにもてなし給は
で。よる〳〵はひとつ所におほとのごもり
よろづの御ならひ。はかなき御
あそびわざをも。こなたを師の

○物ぐちと　細　宮の姫君也

○心ぐるしきをひ　或抄　宮の君れたちくるしさるなと云也

○くくちまろや　細　紅梅大臣の用意也我實子
ハくりとりてめろくやうるもいろくと

○さくくうん　細　紅梅大臣の羽ま木柱君へ上ル也
これハまくのる也

のやうなる事をすこしてぞ　これもあり
ひわるびおけるなどを世の
つねのかずしてとかかる
ぐにさやかはおきくさもひ
そまつおらずくろかまで
そかしおのかこころのどん
をひろもりをしらさ海のず
わいどやうばさおつることくん
くりすぐをおつくくらも寄り
やかかやしとどかこざ海をおと
おりひいをぐやうるもこころぐろ
しるどおがてきぐるんさ海

○物ぐるくこと　河　同事
細　實子ま差別有まくさくく

○母君ろと　乗　母君ハかむしまあまつきて内へまいと
也くくまハくれくりささの羽とうきう又後の羽ま
内くのる心ろくこう
○さくくまさやくの　細　母君ハ羽

○かたくせる　乗　夫婦の業りまハくさくれ羽也

○のちく衰ま　孟　小方我ま成ろ後く

○世とくくしくく　或抄　宮君くくへ尼ニ成ル
心わくさくくとくハ定めるくく也

よおがくさぎてのるくおが
てくくくくづくくまくくと母ま
くもやくしおけまでくさくふや
うの世づくさくさ海おもひり
づくくもわくくまくれで
ものくなんくくくくくづま
るづくはすくせふまくて世
よあんくぐりハくんまん後
でと衰ふくくわくくれでよを
きひくくくみてもをのぼるん
くくくよあるをくくくあて
るくくくくくくんかどくくあて

○いつきも　弄　父大納言の心
或抄　宮の君ハ継子なれとも實子のごとくなる也
○ゐてうちと　或抄　宮君物ゐて継父なれ共
こゝろ也

○うへゐてうとせん　細　母上のゐ留守なるゆへハとも
或抄　大納言の御宮の君ゆへなる也

○ゐ[illegible]　或抄　宮君の返答とこそ侍て大納言
の心也

○うゝきハてを　弄　世界ハひろし我ひとあゝ
ちこちくわうとわるこゝろ也

○いとゝいうゝう　或抄　我ひとりうちの業を
心もとなく思ふ也　宮君のうちを天下と思

はうこうぐ世のおもひやりかこと
をどもきこえおよぶもいづれも
ものどもおやうの人どもはうちを
人どやとゆゝしうおぼしてゐたれ
ばそこうもれうきて。
人をれどもたゝあめぐーやと。
のぐさのうきおぼてどゝこて
うこゝばをどだに。えうんてまろう
ぬまぐ。うへおとゝもおかどい
ちうろうてまろうぐきを。
うとしくおぼしとうおぼうき
るれだこうろうこれおどゆゝし。

こゝまのまゝふおあるべきいとうへ
おどおのふおうこゝおぼ所とも
をうひおどおておおうこゝ海
うこうおりひやうもておうれ
よおぼゆうへのおうこゝ海
ものおぼひおどをうちをへよ
をうこゝしおりひをこれど。
このこゝふえうもまうこゝばや
おうへうものおぼれ世界のうき
ちうものおぼうれどひおど
とうよまうこうものづう
方おべううおどいとどゝ

○月ごろ　細　紅梅大臣の詞
○にしのかたに　細　中君也
○さもまねひ　或抄　中君ハ琵琶をとるとひとりつ
へくやおぼえんと
○なまかたほに　細　琵琶を評してなり
孟　箏のことハかたほにて琵琶ハよろしきれハと也
○おきな　或抄　紅梅の自称也

うちひそめ給ふ。月ごろなにた
となく物さわがしきほどに御琴
の音をだにうけ給はらで久
しうなりにけり。西のかたに
侍る人ハびはを心に入て
侍る。さもまねびとりつべくや覚
え侍らん。なまかたほにしたるが
きゝにくき物の音がらなり。おなじ
くハ御心とゞめてをしへさせ
給へ。翁ハとりたてゝならふ物
侍らざりしかどそのかみさかり
なりし世にあそび侍りしちから

○そのかみさかりの　孟　紅梅の耳聞てあると也
○むかしおぼえ　巴抄　父蛍兵部卿宮のに似たると也
孟　左なれどもいひなして右と云也
○右のおとゞ
夕霧也
○源中納言　弄　薫中納言のよし竹川の末に見ゆ
其時紅梅も右大臣になされたりとてこゝにハさ
大納言とのこれり又椎本の中にもかほれり匂
宮巻より椎本まで五巻混乱せり別に注せる
ものあり
○手づかひすこし　弄　なよびたるハつよからぬなるを也
なまめかしきさまにうつくしう女めくとて中〳〵ゆ

にや聞しるばかりのわきまへ
ハなにごとにもいとつきなうハ
侍らざりしをうちとけてもあそ
ばさねどとき〴〵うけ給はる御
びはのねなん昔おぼえ侍る。故
六条院の御つたへにて右大臣
なんこの世にのこり給へる源中納言
兵部卿宮なにごとにもむかしの
人におとるまじういとちぎり
ことにものし給ふ人〴〵にてあそび
のかたハとりわきて心とゞめ給
へるを手づかひすこしなよびた

一りをりとめ心うへし私系町り音のるとつ
よくぬいをうの音ゐれハ也といふハ麝うり是
よあるすこそそ引出てちろへし
巴拙 源氏のりうるいるると心えて可然乞
或拙 物ゝよりハ夕霧のる也此四琴の音宮姫君
のり夕霧ゑ似ゝ
○とてちろやるる 河 押手 柱 撥音
○ちゝさと 弄 琵琶の柱とをてるるちとるる
○廿のことて 巴拙 廿のハちゝ不入ゆへと中く
ゝゝきり殊勝と
○女房ゐゝと 巴拙 皆紅梅尺てなる中よりゝさハ
琴ゐゝとりつゝとて心ゑ任てゐゐれゝるとの意

だちとうん やゝぶハをび
ゐゐぶしゐの行ゐをこれ
行ゝのるゝこゝいゝゝ ゝばし
ゐへまびとハをてゝづやゐる
をゝゝかをる物ゐるふぢゐ
かゝだちをゝのゐゐるて梅
ゐゝゝゐゝゝゐゝん 廿のゝれて
ゐるくゐゝりけるゝでゐるべ
ゝんやはゝまゝてのゝゝ 廿
房かゝはゝゐゝてまゐる
ゐるくかゝいゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゐゝゝゝゝゝ

○ゝつ人ゝ 細 大臣の羽也
○ゝきゝゝゝ花 殿上童ハ束帯の時総角
と是とゐゝゝゝのゐゝハ直衣といふ
ゐの時ハゐゝハゐゝとゝてゝきゐる也
○きいきいてんゐ 弄 紅梅の嬬 廿東宮まゐりしゐ
○ゆゐりきゝて 細 小方ゐゆゐゝ 又ハ若君ゐ
ゆゐゝ 紅梅の羽也

ゝゝふまゐてゐゝれぶゝぶ
ゐゐ人ゝゝゐてゐすぶゐゐ
ゐゝゝぶゐゐゐまゐゐゐゐ
ゐゐへゐゐんゝゐのゐゝゐ
まゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

○まくらことばとなる　巴撫　若君の笛と畢下也

○をしうあめと　盃　をさ〻恐也なるべし

○ふるしとなり　盃　金官のひとめ也

○ひさご　河　瓜弾

弄　琵琶も瓜引物荷

○りはつ　弄　うそ笛也用之　河　皮笛　嘯也下略

細　嘯也うそ吹きて唱奇なるもの　柏子取給なり

○此東の　河春風花戸千業行暁日東登一樹花　白氏　文集

盃　盞の品共代住給るなり

○彩近さ　紅梅　細　巻の名となり

○ちるくの花　成撫　大納言の詞也

○ちるくの　河古今　君なるてれるるなれ　撫花

色ともくもちるくのそしるの

○袁ひろきんー　細　昔のなとりひ出し給也

○うくはうそ　巴撫　紅梅の童躰の時也

○此君ちと　万水　白宮墓なるのなとなり

○さりて　孟　源氏のさりようにて見へ唯今の人くハ端り端るそもるさと

心のうち　孟　ひとり也

○さちくさくの　巴撫　源氏よるかくるくく也

○いさめるね　孟　生廻也

○つりての　或撫　源氏のるとひ出て昔こひ〜れハ源氏のいゆりとひて自官へ紅梅と奉る也

さまるもどえ〜ぐりよもやぐ
えぬるハるとたぐひあるぐと
ありいきこえしこころのう
しやわうきんなりこころめてこひ
おもるもしひわくやるくるる
こるどけちこえんのとこれまり
ていこめぐあいなぐるを冷
ちぐこあぐしこと撫し
ぬるとあぐやるくおるてがの表
よすぐくありひめぐくこれ
ぬるつぐのまびぐこるやくる
やるなていこぐまるなぬ

○いくハせん　巴撫　ひとハくるふ也

○あるんひとり　河　大論云釈迦佛入涅槃之後阿難盍高座結集諸經之時其形如佛仍衆會疑佛再出給　弗　阿難未證四果之人也仍羅漢不用也其時阿難自然現瑞四果とハ羅漢の位四あるる也阿難羅漢の位也ひとりとハ阿難と云也

○やくこまふ　巴撫　如佛　源氏と佛と比て兵〻と阿難とるくく

○とるん　細　トとりて又くさと

いくぐやんひとりのこひこ沖
こるこあふこのこやぐこるこそ
ハやこけのこれぬひこんが
あぐりるはあるんぐひりるあこ
ぬんをかこびあぬつこるこ
こふこうここるぐこのあること
やこふまぐこるをぐこるふまを
こるこんりこそ

○心あるて哥　孟　彩近き梅とこれもこるくく紅梅の香也　河　先也又云待也　案之両説共證本る声とさせり而猶先の心相叶ち　万葉云　あの手の年ゆさるる春くてまるくるひとハ我宿るるり

こころあるてうぐのこれるる園
の梅るまぐうぐひとのとぐや
こぐこと紅のこるふつるやぐ
こるてぐこるるこるこるぐふ

○此君の　孟　紅梅の息也

○うれゆきまろ　細　白官のうれまろがさうし也

○中宮の人代につかひ　弄　兵乃官の中宮代に局より出る也　或抄　人の代局ハ直廬と云也中宮の所ハ白官の宿直不也

○きのふハうて　或抄　紅梅の息と乃ろをかて白官の侍司也

○しくまろて　或抄　紅梅の息の司也

○うちうて　細　二条院のうち也　孟　白官の逐電也

○めしとるうて　弄　白官のしのの所へ也

○春宮ハ　弄　紅梅の息を東宮代まろが侍ら姉の女御ハまいり給へりいとゆゑあること　細　白官の司

○ときこしきて　弄　あるハ時をしられてとと

○まろハさた也　細　若君の司　弄　白官のみまへはさてつひらうとと

うちうれゆきまろ　うちあてこそ
やまきさうしもとこそ
あるべし　ひさんどのそ
とおくおつまろうどとの所
とのうみあしとるもてこそひ
給へば　人ぐハちうもまつば
まづちうぶてしあやふ
なうあまにハいとま
ゆるされうあるみいとまぐるまか
しまとまるとどそれ
て人をうあるとのうまへぶつハ
さた給へしそらうとう

○我とハ人をすゝと　細　白官の羽紅梅大臣と恨る也

○ねるめ〳〵さ　也拗　王孫へうつさいとゝ思ふ
うとゝ古兵乃女東のくさゝ任ぶをさしての語也
古めゝ〳〵ゝも王孫さんハあひ思ひ給へとゝや

○此花と　花　ねとゝろ乃ゝとゝ人ゝろ哥

○恨てのち　弄　此羽引哥可有未見之自面
恨て此後さへ人のつきさるいなひてゝれとを
るゝまゝ　此哥如何　恨て後さるハ乃ゝも有まゝ
さゝ是ハいまされ文もつゝハされねハ頼乃あるゝ
ゝハとハの詠也然者此引哥可然哉

○ゝろの上自へろ　弄　白官の羽也
細梅と評ての詠了紅梅ハ必白ひとれゝる物也
此枝ハ色も香と具〳〵ゝろ〳〵
○紅乃色ゝ　河　紅の色ゝとゝれて梅花香をとゝく
ゝ白ハさゝをろ　躬恒

○とゝすゝへて　盃　色と香とゝの也

○ことひいとのみ　盃　白官の若君とゝめ詠へかと
東宮へもまつり給ハぬ也

○花もゝろ〳〵く　花　白官の神れゝとゝいゝる也

○をゝろ〳〵ねを　盃　若君と白官のれゝ〳〵ゝねを詠也

まつよハ〳〵もとゝきゝえさて
めゝれだゝれをバゝんむかしと
思ひとゝるゝきゝゝとゝふゝとゝろゝ
されどやをゝゝずゝゝゝゝ
きゝかゝゝをゝゝめてゝんゝゝと
ゆゝめゝゝいゝおひやりの詠ひゝ
やゝゝをのゝてゝゝゝひやゝよ
ゝるゝの詠ついゝゝよこのゝゝるを
ゝゝをまつまバゝゝゝゝゝて堪て
ほゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝんゝゝ桜のゝ海ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝハをゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○此花のあるじハ　細　宮の君なる也白宮不審なり

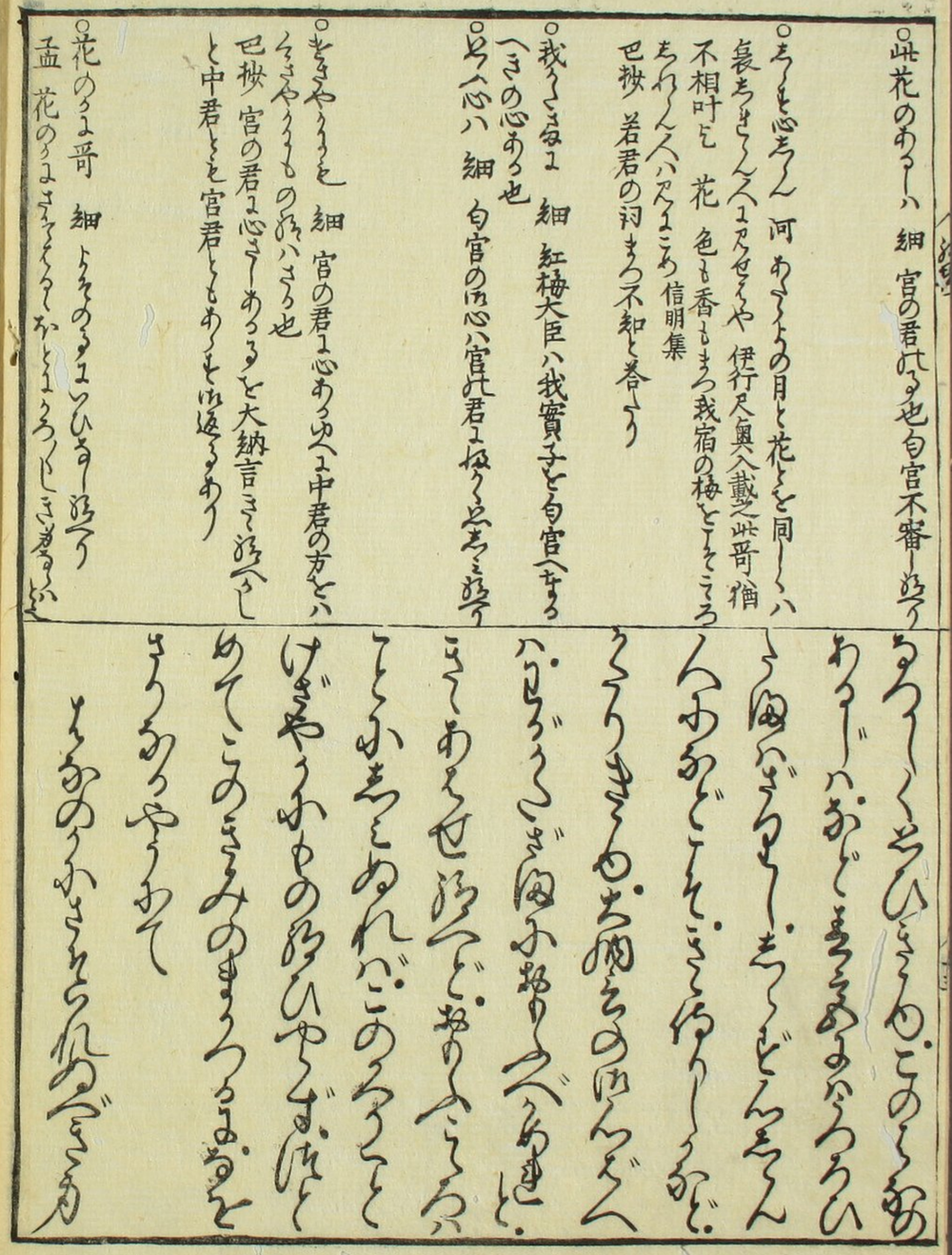
○ちるを心ちる　河　あるじとの月と花とを同しなハ
衰ちるをこそ人ゝ思ひ出ん　伊行尺奥入載此哥猶
不相叶也　花　色も香もまこと我宿の梅とこそ思ひ
ちるを人ハ思ひ出ん　信明集
巴拗　若君の羽まこと不知と答ふ

○我ゝとなる　細　紅梅大臣ハ我實子と白宮へ申る
へきの心ある也

○ゆく心ハ　細　白宮の心ハ宮此君と仮くゝ思ふ

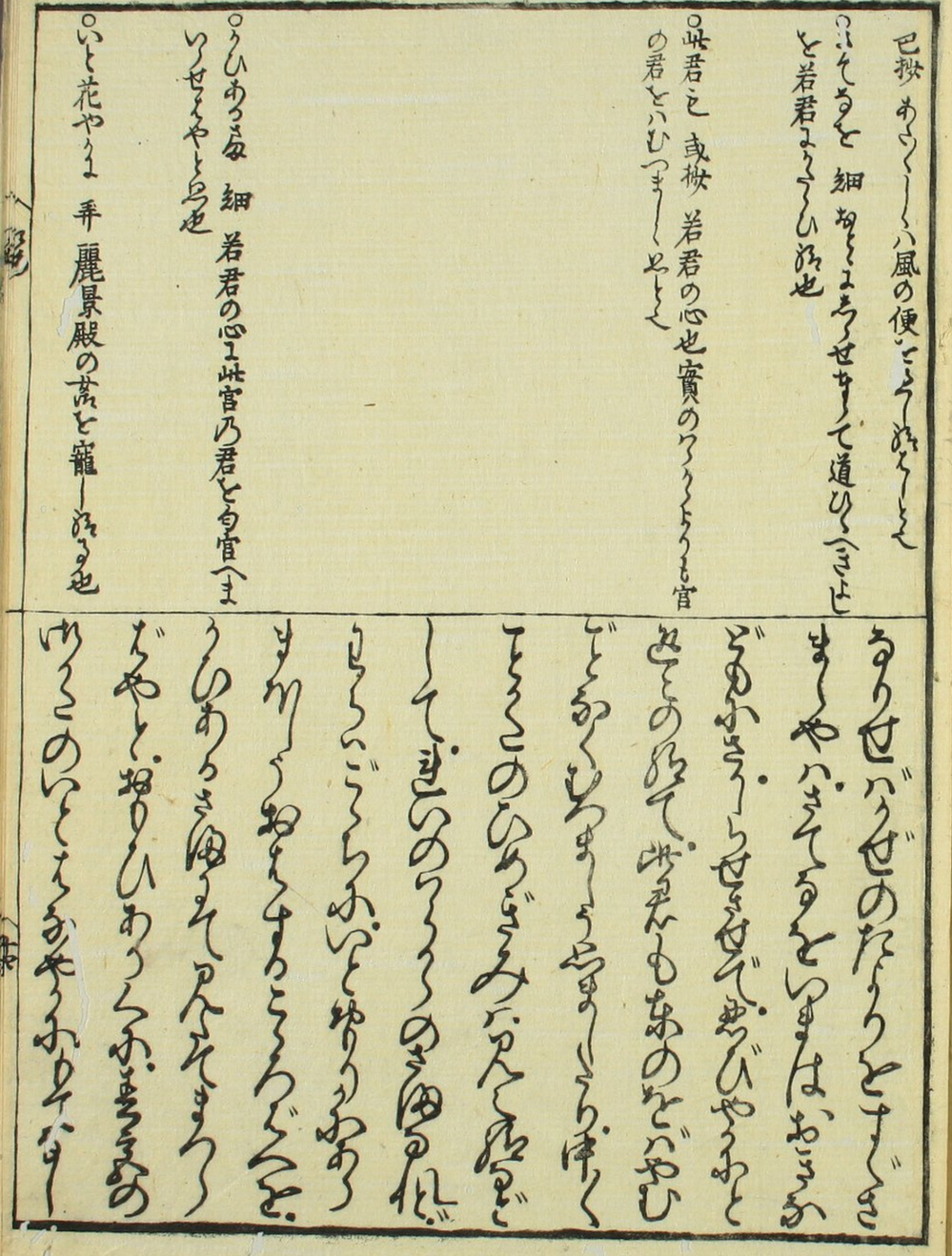
○きゝやうを　細　宮の君に心あるゆへ中君の方とハ
ゝさやうゝものなりハさる也
巴拗　宮の君に心さしあるゆと大納言さ思へし
と中君とを宮君ともあるとなるあり

○花のうへ哥　細　とゝのうへにひさ思ふ
孟　花のうへさとゝゝかとゝにうつしさ者ふ



巴拗　あくゝしくハ風の便とうなるとゝ
○ふそなと　細　ゆゝしうせずして道ひくへきと
と若君にうゝしなる也

○此君と　或拗　若君の心也實のうゝとうも宮
の君とハひつまゝゝとゝ



○うひあるゝ　細　若君の心に此宮乃君と白宮へま
いゝせゝやとゝ也

○いと花やうに　弄　麗景殿の苦と寵しなる也

○此官をば　孟　白官のこと也若君代心也東宮へも
宮の君をまいらせそやとそひし也
○うれしき花乃　或抄　梅花をまいらせれとたう
まて白宮へのそひきすんとく
○これはきのよし　細　更へまいらせ給也

○れうきをうと　細　大臣の羽也

○右の切　花　夕霧の大臣又まれとハ紅梅大納
言なるこの又なる時ハ白宮ハまゐらせ給なりきと

○あるく人　河　化人　日本紀　越人　孟子　下略

給まつりて　あめしとハ沿ひ
るゝいとあるどうらぶ　れば
このやをゞにきらて　屋
らゞやとうひあるくよ　れ
きとものつゞくるうら　生
きのゆくりなれば　世
ねうげものはかうふ　沿
すきうふすこ　給
ゆうきこゞとやの給て　宮
のゝゝ親うゞ人てまつるハ
いとものまやうふ沿うるき
めうをへとやうれゞ人と

○ちとつの哥　細　白宮ハ天然の白ひあるへくても
也ハ梅も白ひとまとへとゝ中君をなる
へきよう也　花　ちとつのあるとあると梅花いと
白ひのちとつあるゞ　兼輔集　或抄　紅梅の哥也

○ちとつのひるさん　万水　白宮の心也ちとつれなの
沿へを真實ニつひるさんとゝちとつ心ときめ
きゝ給也

○花のこと哥　白宮也　細　是ハ公界ニつひる給也
巴抄　色をめてハ好色なりといへんとく

○ちとつまいらせ　巴抄　若君系内也

○ちとつもまいらせ

世んはたらひ給つる沿を
めてまゐらん給ん人どもの
すくやかまゐ給ん　ごうう
ごうて　ふもまいらせ給
又
かうつのまゐらきみが神宮
ばんもえるあれをやらえん
とすきゞゝやあゝとまあ
やふやの給てまとふいひ
るきんとてとうあるやとき
うよゆんどきめ給て
花のもをるんすゞ

○うちと心をきと 巴抄 白宮の心とをゐと心やほく紅梅のおもふなり
○ふのうさ 細 真木柱也
○まろ君の 盃 真木柱の詞也
○人ハるとと 花 人ハるを若君の白ひとおもひし也 宮ハ春宮のはる也 或抄 尚ハ大さき也大さきにおもひて心もつきさりしとぞ
○宮のいとおかし 弄 春宮のれ推量有しとぞ
○ときわさうと 弄 荒字の心也哥にハ此心に用ゆ ハあれ也春宮のをしさとりえ根ならしとおのさ乃うつり給也

ゆうぐれのおめづらしやくもかげん
るぞみるところそめずらしくなり
へるところやましとおもひぬ
なげかしのくさまでまよひて
うちにきりのことのなげきでふ。
まろぎさ乃つゆとのむしく。
まりいでてるもまわひのほと
おもしろきをへるをとらて
をとこやのいとあわれよりて古
つのうめよちうつさやのしふかう。
むづかしきをいときよめくりぬ。
ぞうぎんし給しておほかりし

○こうにれせうそや 弄 少分月兵尺宮うつれせうそこありさうくさハ尺てさりしうさりやありけうしとぞ
○さうし 細 紅梅大臣の詞 ろうりありしとぞ
○わうさのつま几 或抄 宮君のうつれ紅梅也
○うつり香ハ 或抄 白宮のれうつりれる也
○花ましひ 一本花の字なし 或抄 宮つくにまとう叙せと白宮のとくにハえ焼きわれとぞ 盃 花ましひとわう本有いろくの草花也
○源中納言ハ 盃 薫也
○ささの世乃 或抄 前世の宿業いろやくるる果報うやとぞ

くてにはせうそこやありけるも
見んとざりしとものさまへハざう
し梅の花めでなさきみだれだ。
わうさのつまのお孫いとさり
にみんとしもさぶかでありて
そまつきてるもあつうつり
香ハきにそこうつと知れた
まじひしなくんおもさぶさえ
えんあるか源中納言ハうつ
ざ梅にこのましうハたさまぎさ
でくのにそよめかれおもう
ささの世のちぎりいうあけり

○物すゝ花の名 弄 白宮薫の天性ハ奇特なるを
ゆゑ心なり花ハ種性なる也又薫の天
性より名り給ふ梅をとゝ

○此ゆゑやゝの 弄 白宮のゆ
細 白宮梅を殖し給へるとゝ

○宮のゆゑハ 弄 宮ハ君のゆ

○人ゝ人ゝとゝ 身梅 宮君の心なり可然歟

むしろひろげてさとわたて
わまこ ゆかしかのゝ
梅ハ世のあをんねとゝ
このやうどのあでうまさ
ぐ かどとかよう
もまづけやのしたやはたの
ハかのゆゑ
まうう
ゆゑ
あ
あ
う

○さむしひろ 細 此宮の君ハ父宮ゆゑ
ゆりてのゝ
どのゝ
ゆ宮の君ハ心さ 念ゆ

○うゆさハ 孟 宮の君ハ躰也

○宮ハゆさいの 河 我このむしろの心ハゆさりゆ
めといり是ハゆさゆ

○品文れと 巴梅 宮君ハ白宮の品文さいくわり

○ゆゆ心を 細 紅梅大臣あゆゆ我むもあと
と心を給也

わりてゆやさしひろ
ぐこゆ
とびい
ゆ
ふ
ふきいの
ゆゆいで
ゆ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ

○いとおもしろし　巴扱　大納言の中君をとしごろをいとおしう思ひきこえたる心中

○まきもの心　盃　返すもるをれハまきもの玉のよるをとおもひなれんと白宮の心也

○るをより八人の　巴扱　白宮ゆるをと心方心中よりひろ

こころまうけしをとろかれていとおしう思ひきこえたるこそ
いとおしう思ひきこえたるこそ
ものくもあるこころもおぼ
のこのたをはなてあるひか
げのこころ心方もおぼし
のあるこころあるさまにてもか
けまくはまもるのはこころのて
やはりやしでもあるふ
うハ人のはあるこころはあ
もんをまもるやうおひき
をとくるこハ人をはなる
あるこ心方おかるはぐわ

○八の人やゆ姫君　弄　宇治のうつ〳〵ゆ宮ゆ中姫君
のゆ椎本巻にあり其時のゆをとこるのをりを
きゝもてわりさゆとあり橋姫巻にハ度也椎
本巻にあり巻に混乱せりさゆ也されハ此討の
時分ハ椎本巻と同時也別に委注を

○まちやうにハ巴扱　中方宮の君と白宮とハ定ゆ
ゆハ也ゆ絶えとハあさ〳〵しきを宮の
君ゆ〳〵こと
○こをるさ　弄　白宮の念比にゆをとこ

○さう〳〵　河さう〳〵に隻ハ人まひさゆの
さやく霜夜をこれひとりあり
弄　中方のこゝろ返るをとゆる也
或扱　此さう〳〵ハ人こと也　万葉　賢良　河海
引哥も賢良也

いとしいこころあるさまにてこそひ
ゆをとびこゝろおかく八のこゝや
のひあるこゝふもはこゝろぐ
あこゝでいとこまこうまこぐわう
さゆこゝのりげるこゝゆこゝろの
あるぐこゝふこゝもいこゝつて
まこれでまちやうにハゆあり
こゝろをこゝげかこゝろ
よをびてあこゝみであこゝふ
こゝこゝろこゝこゝゆ